慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	歴史家マアドックの一生
Sub Title	
Author	田中, 萃一郎(Tanaka, Suiichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.2 (1922. 2) ,p.311- 317
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220200-0311

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

歴史家マアドックの一生

濠洲メルボオン大學の日本語教授であつたジエムス・マアドックは英文日本史のうちで最も價値多き勞作を遺したのであるから正に歴史家として後世にその名を傳へ得可き學者である。而もその突然の訃報に際して去る十一月の上旬に神戸のロバアト・ヤング氏が『クロニクル』紙上に公にした The Late James Murdoch の一篇は得意の絢爛な才筆を以て波瀾多き一生を叙したもので頗る讀んで面白い。以下に説くのは蓋しその抄節に過ぎ無い。

James Murdoch は一八五六年にアバヂイン市を距ること遠からぬ Stonehaven 村に生れた。父は僅ばかりの畠の耕作の傍荒物屋の店を經營して居つたので、マアドックは夙に父の手助に利用されて居つた。併し十一歳になつて中學校 grammar school に入學することが出來たが校長から渡された九九の表を手にして一時間程經ても暗記することが出來ず、その後數ば試驗されたが頭を振るのみで校長も聊か失望したと云ふことである。然るにその日の授業の終る頃になつて悉く暗誦して一を二倍するの二から十二を十二倍するの百四十四まで毫も間違はなんだ。この日初めて九九の表を見た少年としては確に記憶の非凡なことを示すもので、この記憶は一生を通じて衰へず、能く談話の際に古人の言葉を一言一句違へず引證し又書架より書物を取り出しては直ちに所要の頁を檢出したものである。

中學在學中は依然として父の手助を命ぜられて居つたが暇さへあれば手當り次第に讀書に耽つた。且その中學にはアバヂイン大學生の爲に給費の制度 bursary があつて毎年競爭試驗があつたの

で遂に競爭に應ずるの覺悟を定め蠟燭の薄暗い光線を便りに徹夜勉强して晨に達し父に呼び起されて始めて臥床に入ることも珍らしく無かつた、發育期にかゝる苦學をしたのは確に成人の後に蒲柳の質となつて現はれた。併し苦學の效空しからず首尾克く大學に入學することが出來た。當時アバヂインは蘇格蘭大學のうちで第一位を占めて居つたが敎授の一人アレクサンダア・ベインは自分と出身の似て居るこの青年を愛顧した。マァドックは乏しい給費のみで苦學を續けたが卒業の時には五科目とも一番であつた、是はアバヂイン大學の歷史に於て空前の成蹟であつた、それで更に學業を續けてM、A、の學位を得たが同時に研究費 scholarship をも給せらるゝことになつて牛津なり大陸の大學なりに遊學し得る機會を得た。それで笈を牛津に負ふたがアバヂインから轉學したものには別に得る所も無いのでゲッチンゲンに遊んで Benfey 敎授に就て梵語を修め次でソルボンヌにも學んだ。元來數學が得意であつたが研究費の關係上古典語を學修しかくて二十四歲にしてアバヂインの希臘語の助敎授になつた。

その後間も無くマァドックは濠洲の中學校敎頭 second mastership に招聘されて年俸一千磅の校長となつた。天授の敎育家でノートの詰込敎育を却け學生をして親ら頭腦を働かさしめ深くその心服する所となつた。併に學校行政の俗務に堪えずして校長を辭し他の中學に轉じて敎頭となつたが交際社會に出入するの煩はしきと敎育者に課せられた窮屈な暮し方を厭ひ斷然新聞記者となつた。當時は濠洲に勞働運動の起り初めた頃で一大勞働黨を組織して濠洲の前途を左右しやうと云ふ大望も起つた。それで代議士の候補者に推薦されたが、併し現在の社會狀態の下に於て到底行れぬ黃金時代の實現を虛僞と知りつゝ選擧人に說く氣になれ無かつたので、依然として新聞記者として政治敎育の爲に貢獻するのが結局有形上の條件を改善する捷徑であると考へて居つた。

當時濠洲の勞働運動は支那苦力の問題に忙殺されて居つた、白濠洲 White Australia の思想が芽生

へをした時で資本家は低廉な勞力を輸入して勞働者を奴隷化せんとして居ると云ふのが勞働階級の心配の種子であつた。マァドックは有力な新聞社からこの問題の調査を委託されて支那に行くことになつた。支那苦力の來歸する汽船に就てその生活の實狀を視察せんとし故ら三等船客となつて乘船し食物その他の待遇の惡いのを見て三等船客の總代となつて船長に陳情したが船長は固より對手の新聞記者たるを知らず惡口を以て之に酬いた。後にシドニイの新聞に三等船客の待遇に就ての攻擊の公にされた時に至つて始めて後悔したことであらう。殊にこの航海中の逸事として語る可きことがある、それは一等船客は常に上甲板から三等船客を愚弄して見下して居つたその中にも金鎖金指環を光らして流行の衣服を着けた氣障な一紳士があつて或る日一人のレディを伴ひ三等船客が午餐の殘りの馬鈴薯を投げ合ふてるのを眺めて笑ふて居つたが忽ちその一片がペタリと顏面に當つた。紳士は苦い顏をして引つ込み船長に訴へたので船長は三等に乘つて居る歐人一同を叱咤しマァドックを以て巨魁と認めた。故に船が次の港に着いてマドックが一旦上陸して扨て衣服を更めて一等船客として乘込んで來た時は船長は怒髮逆立ち直ちに三等船室に歸れと云ふた。併しマァドックは冷然一等船客の切符を提出した。船長も漸くマァドックの身分を知るに及んで努めて冷靜を示したが曩のレディも聽てマァドックと談話を交ゆるに及んでその學殖に服し香港まで談論を上下して航海を忘るゝ如くであつた、金ピカの紳士の不機嫌なりしことは思ひ遣らるゝのである。

香港廣東に於て調査を遂げたる後支那苦力に關する報告を濠洲の新聞社に寄せてからマァドックは日本に來て見た處偶然大學在學當時の一友の九州の或る學校に教師をして居るのに邂逅した、是は一八八九年のことであつた。その邂逅の結果大に日本に興味を感じ神戸から東京まで漫遊し一旦濠洲に歸て家事を整理して後日本政府の招聘に應じて教師となる決心を定めた。翌年日本に歸て來て落ち著いて教育に從事するに先ら各地に旅行して旅行案内書を著さうと云ふ考を起した。この旅行

の途上九州の有名な炭坑を視察し坑夫の生活狀態の如何にも悲慘を極めて居つて露西亞の鑛山にも劣らぬのを見て前後數回に亘れる視察記を起稿し之をJapan Gazette紙上で發表した。御用新聞Japan Mailの主筆故人ブリンクリイは毒舌に長けて居つたがマァドッグの摘發せる問題を世間から葬り去らうとして彼の視察記はa former shop-boyの書いたものであると思ふ隨て價値は無いものであると評した。是は勿論マァドックが曾て父の店で働いたことを云ふのであるが併しその學識は日本政府に雇はれた退職砲臺士官よりも優れて居つたのである。マァドックはこの評を讀んで笑ひ乍らBrinkley's controversial ethics showed that even a public-school education sometimes failed to make a gentleman と曰ふた。それは兎に角この摘發の結果鑛山に於て幾多の改革が行はれマァドッグの攻擊した甚しい弊害は除かるゝことになつた。日本に於ける勞働問題の研究者はマァドックの效績を忘れてはならぬ。

マァドックは初には奥平伯爵家で建てた中津の中學校の英語教師と爲り次に東京の第一高等學校に奉職した。當時東京の大學には立派な英米人が多く居つたがマァドックはその間に於て有數の人物であつた。初に公にしたものにはDon Juan in Japanと題する一卷の詩集とアリストファネスの鳥群を模倣して東京在住外人の生活を諷刺したものとがあつた。次で日本と濠洲とを舞臺としたFelix Holt Secundusと云ふ小說、又工科大學のバアトンの日本寫眞帖から思ひ着いたAyame-sanと云ふ小說が出版された。其後に又自傳體の小說を起稿したが出版者が無かつた爲その儘になつて居る。又九十年代に週刊新聞發行の計畫を立て多年日本に滯在して居つた佛人Bigotが漫畫挿畫を擔任し本文はマァドックの筆に成りJapan Echoと題したが永くは續かず六號で廢刊となつた。

一八九三年頃マァドックは不思議な冒險に加はつた。濠洲では八十年代から九十年代の初に掛けて社會主義が大に行はれたがWilliam Laneと云ふ空想を好む勞働運動の熱心家があつて、南米パラグァイに共產主義の一植民地創立の計劃を爲し、

パラグァイ政府から二萬五千エイカア程の土地を得、濠洲の勞働者を引率して之に移住した。是が即ち新濠洲の計畫であるがマァドックは濠洲に於てレインと相知りその手腕に敬服して居つたのでこの計畫と運命を共にせんとし校長として加盟せんことを申し込んだ。申込が快諾されたのでマァドックは日本を後にして南米に向つたが宛かもチレとアルヘンチナとの戰爭中で一箇月餘りマァドックの乘船はモンデ・ヴィデオに抑留された。その間地方の政情戰爭の勝敗等を研究して一篇の記事を起稿したが是が外界に公にされた最初の纒つた記錄となつた。軈てパラグァイに着いた時は新植民地は既に瓦解の機運が兆して來た時で紛擾軋轢絶え間無く人心は倦み果てゝ居つた。マァドックは曾て『自分の社會主義實行の經驗は殆んど飢餓に瀕せる人々に牛肉を頒つやうな難事で、嫉妬羨望盛に行はれ肉屋の主人は右手で牛肉の目方を量ると共に左手で短銃を握て居らねばならぬ』と云ふたことがある。レインは思慮ある平等主義者であつたが壓制家に一變し、冷靜な人物であつたが迷信家となつて仕舞つた。或る朝マァドックが生徒の集まらぬ前に芝生に横になつた處へレインが乘馬の儘やつて來て、新濠洲のことで神樣の御意を伺つて見たと云ふてマァドックを見詰めた。マァドックはそれも可からうと答へたがレインが一々神意を伺つて進退を決するやうでは新濠洲は最早自分の居る可き處で無いと諦を着け斷然關係を絶つことになつた。その以後もマァドックは社會主義とその理想とに對して同情を表しては居つたが、併しかゝる政體を樹立するには今日はなほ未だ時機が熟して居らぬと云ふ意見を懷くやうになつた。因にこの新濠洲の計畫に就ては Stewart Graham の著書が倫敦のマァレイ書店から出て居る。

英國を經由して日本に歸ることになつたがリオ・デ・ジャネイロで日射病に罹り數週間重態に陷つたので遂に病前の健康體に回復せなんだ。日本に歸つてから金澤の高等學校に在職中始めて日本歴史の研究に着手した。尤も事に茲に志を立てたのは數年前からのことでパラグァイから日本に歸るの途上數週間倫敦に滯在中も大英博物館で日本

へ渡航した最初の航海者に關する材料を渉獵した。最初は葡萄牙人が初めて日本に渡來した一五四二年から長崎出島の和蘭人の外すべての歐洲人に對して鎖國の令の布かれた一六三九年まで日本と歐洲との交通の初期をのみ主として研究し、その結果が一九〇三年に A History of Japan during the Century of Early Foreign Intercourse. (1542-1651) となつて公にせられたのである。この書は今京城の Seoul Press の主筆をして居る山縣五十雄氏との共著で山縣氏は日本の史料に對して責任を負ひ、マァドックは專ら西班牙語や葡萄牙語で書いてある耶蘇會ドメニコ會所屬宣教師の信書を讀破し、バアジェやシャアルヴォアの批判考證なく編纂した第十六世紀の日本に於ける基督教に關する書物に就て秕糠を去て穀粒を拾ひ擧げたのである。この一冊の著述のみでも以て能く著者に零細なる遺事を材料として興味ある過去の史實を讀者の眼前に活躍せしむる非凡の史筆の具はれることを永く後世に傳へ得可きであるが、マァドックは更に一歩を進めて傳說的なる開國の初より今日までの日本史を大成せんことを企つるに至つた。そこで五十歲に近い年齡を以て新に日本語の學修を始め不屈不撓の熱心を以て古い記錄をも容易に讀み得るやうになつた。かくて愈よ組織的なる日本史を起稿することになり、その第一卷即ち葡萄牙人の日本發見迄の歷史は A History of Japan. Vol. I. From the Origins to the Arrival of the Portugese in 1542 A. D. と題して一九一〇年日本亞細亞協會から出版された。それで前年に出版されたが第二卷となり、第三卷は德川時代史、第四卷は明治時代史で全部完結となる豫定で、德川時代史は既に脫稿して居る。

マァドックはオウルコック公使の頃に英國公使館のあつた品川に暫らく僑居して日本史の著述に耽つて居つたが次で鹿兒島の高等學校に赴任し夫人の名で地所を購ひ菓樹園を設けた。傍ら『ジャパン・クロニクル』にも寄稿しスペンサーの哲學を論じ長崎出島に關することを始め日本史に關する研究をも發表した。偶ま英國大使サア・クロオド・マクドナルドが鹿兒島を訪問した時マァドックを訪問

して大にその人物に傾倒しかくて濠洲政府からメルボオン大學日本語教授の適任者物色を依頼して來たので直ちに推薦したのである。マァドッグは餘生を鹿兒島に暮す積であつたから聊か躊躇したが結局應諾し五年前に濠洲に赴任した。爾來毎年一回宛日本に來り或は助手を雇聘し或は教科書を買入るゝことを例として居つたが、昨年來た時は健康も回復したから今後十年のうちには明治時代史をも脱稿し得るだらうと云ふたのに六十五歳を一期として病に仆れ日本史の完成を見なんだのは惜む可きである。マァドッグは先妻との間に出來た男子があつて今米國に居るが蘇格蘭に親戚は無し結局は鹿兒島の土となり度いと云ふて居つたとのことである。（大正十一、三十。稿）

田中萃一郎